

ソニンケによる「文化週間」の映像データベースの構築

著者	三島 禎子
雑誌名	民博通信 Online
巻	167
ページ	8-9
発行年	2021-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00009685

ソニンケによる「文化週間」の映像データベースの構築

文・写真 三島 禎子

収集した映像資料の共有をめざして

本研究は、2017年におこなったセネガルにおける映像資料収集の発展形として発案したデータベース構築プロジェクトである。対象となるデータは、ソニンケ民族が主体となって開催された「文化週間」の映像資料である。「文化週間」とは、モーリタニアやマリと国境を接するセネガル河流域の人びとが参加する諸民族の文化や技術を紹介する行事である。

映像取材の成果についてはすでに、ビデオテープ番組4本(三島監修 2019) やみんぱく映像民族誌(三島監修 2020)として発表しているが、番組内に収めることができなかった膨大な映像資料が残されている。このなかには貴重な無形の文化資産が含まれており、記録するだけでなくデータベースとして利用可能な状態に整えることが、博物館の使命としてまずもって重要である。さらに、本館のフォーラム型情報ミュージアムの観点からは、そのような情報を、資料を保有していた社会の人びとと共有し、意見交換をおこなうことによって収集資料を生きた情報として活用することが求められている。フォーラム型情報ミュージアムのプロジェクトの多くは、本館が収蔵するいわゆる物質としてのモノ資料を対象としている。しかしながら、写真や映像も例外ではない。後述するように西アフリカの諸民族による「文化週間」には視覚的情報以外にも貴重な文化的情報が含まれている。モノや映像の情報を対象社会に還元することは博物館の使命として重要であるが、情報の質を高めるには双方による共同作業が必要である。本研究では、対象社会の人びとが情報を補足できる仕組みを映像データベースのなかに組み込み、より利用価値がある情報を提供することを目的にしている。

データベースの内容

「文化週間」が開催されるセネガル河上流域はもともと諸民族がともに暮らす生活空間であり、人びとは同じような文化を共有してきた。しかし1989年にセネガル・モーリアニア紛争が起きて、流域の人びとの往来は途絶えてしまった。「文化週間」のねらいのひとつは、そういった背景をもつ地域の連帯を取り戻すことにもあるとされる。ビデオテープやみんぱく映像民族誌では、主体者となる地域ラジオ局の役割や、完全に寄付だけで成り立つ運営形態、地域の女性グループやボランティアなど多様な参加者に焦点をあて、それぞれ

の立場によるこの行事の意義を探りながら「文化週間」の全体像を描くことを目的とした。

他方、本データベースでは、時間的制約がある映像番組とは異なり、20カ村でおこなわれた民族文化を紹介する舞台の始まりから終わりまでを網羅的に取り上げることにした。それぞれの村で開催された舞台では、さまざまな儀礼や職人文化などをテーマにした演目が披露された。このなかにはすでに世代間で継承されずに過去のものとなりかけているものがある。

さらに演目の前後には、伝統的な行事には欠かせないグリオ(伝統的楽師)たちの朗読や音楽の演奏、興奮した人びとの踊り、主催側や招待側のあいさつなどがあり、これらも舞台の進行には欠かせない要素であった。たとえばグリオがどんなことを朗読するのかといった音声に由来した情報と、それがどんなタイミングでおこなわれ、それに対して人びとがどのように対応するかといった視覚に由来した情報がある。このような情報を補足することによって、舞台をとりまく民族文化的な背景をより複合的に理解することができる。とくに、当事者以外の立場から異文化を理解するためには重要な要素である。

データベースの特色

データベース作成の第一段階では、連続した映像資料を意味のある共通の基準で分割する。まず村ごとに映像資料を分割したアーカイブを作成する。すなわち紹介された演目だけでなく、上述したような舞台進行に欠かせない要素も包括しつつ、それぞれの場面ごとに映像を区切る作業である。これは筆者が「文化週間」の本質を、民族文化を紹介する演目だけでなく、舞台を構成するさまざまな要素に見出しているためである。同時に、のちに情報を補足したり、閲覧したりする作業の便宜も考慮に入れている。そのため連続した時間として視聴する舞台の内容だけでなく、意味のある項目ごとに区切られた時間を単位とする映像をそれぞれ基本データとして取り上げる。

基本の映像データが整理された次の段階は、それぞれの内容についての基本情報を入力する作業である。この段階ではいつ、どこで、誰が、何をといった単純な情報だけに留めるが、それらは情報を検索するためのキーワードとなるものである。



「文化週間」の期間、村々を回る地域ラジオ局の車（2017年、セネガル）。

データベースの運用においてはネットワーク環境も考慮する必要がある。データベースは映像が主体となるのでデータ通信量に配慮し、携帯端末での閲覧に技術的な支障がないように加工しなければならない。というのは、まず現地の人びとによるデータベースの利用を考えているためである。セネガル河流域の人びと、または海外にいる同郷の人びとにとってパソコンを使ってインターネットを利用することは一般的ではない。また対象社会におけるグリオなど伝統的な文化の継承者たちは口承文化の担い手であり、文字によって記録が残される習慣はない。一方で、携帯電話は画像や映像を見る手段としても利用され、一人が一台を所有する環境になっているので、データベースを利用する手段として携帯電話端末が有効であると考えている。

本データベースの公開に際しては、完成されたものを提示するのではなく、今後、情報を追加してゆくための土台を整えることを想定している。対象社会の人びとが情報を利用したり、追加したりするためには、音声による案内と、音声による記録手段のほかに、記録された音声情報を文字化する仕組みも必要である。舞台の進行のなかで聞こえてくるソニンケ語やフルベ語、バンバラ語など現地語の逐語訳と欧米語と日本語への翻訳をデータベースに追加することで、対象社会以外からの情報検索と利用が可能になる。このように本データベースは、人びとが語り継いで記憶に留めてきただけの情報を音声というかたちで残すことを可能にし、別の利用者がそれを文字化することで、より汎用性の高い情報にする手段として活用することを想定している。

更新し続けるデータベース

本データベースの意義は、映像取材で撮影した映像資料の包括的かつ効果的な利用を狙っている点にある。一週間にわたる取材で得られた膨大な資料は、時間も情報量も、視聴者も限られたビデオテープやみんぱく映像民族誌などの番組のなかでは十分に活用することはできない。映像番組のなかで描き切れなかったものは論文（三島 2020）で発表したが、どちらも研究者の視点という限定付きである。とくに後者では、筆者自身に「文化週間」という運動の背景を理解したいという思いがあったために、人びとが表現する民族文化の内

三島 禎子（みしま ていこ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は文化人類学、西アフリカ研究。共編著に『Questions de migrations et de santé en Afrique sub-saharienne』（L'Harmattan 2014年）、論文に「民族の離散と回帰—ソニンケ商人の移動の歴史と現在」駒井洋監修編、小川充夫編『グローバル・ディアスポラ』（明石書店 2011年）などがある。

容まで深く立ち入ることがなかった。

一方、当事者たちは、民族文化を記憶から掘り起こし、未来へつないでゆくというメッセージを込めて、それぞれの演目を作成している。研究において映像資料を対象社会へ還元しようとするならば、かれらのメッセージを現実化する方法を優先的に考える必要がある。それは民族文化の記録と保存、そして活用によって可能となる。そしてそれを双方向的に実現するのが、本館のフォーラム型情報ミュージアムという構想である。

映像のデータベースを作成することによって、直接的には映像資料を対象社会へ還元することができる。さらにデータベースにコメント機能を付加することによって、現地からの文字と音声による情報を補足することができ、資料の保存のみならずより広い活用が可能になる。

また、対象社会における文化の保全にも実質的に寄与できる。従来、記憶によってのみ受け継がれてきた民族文化の伝統や歴史を、データベースという新しい形態で継承する仕組みを対象社会に提供することになる。

このようなすべての過程が、対象社会と研究の領域をつなぐ作業であり、それこそが対話を実現するフォーラムの場というべきものに相当する。博物館がそのつなぎ役として行動することがフォーラム型情報ミュージアムなのではないかと考えている。

引用文献

三島禎子 2020「ソニンケ民族の文化運動と地域ラジオ局—『文化週間』をめぐる民族誌的考察」『国立民族学博物館研究報告』44(4): 683-734。

参考資料

三島禎子監修 2019 国立民族学博物館ビデオテープ (S05286, S05287, S05288, S05285)。
—2020「セネガルを越える人と地域ラジオ」『みんぱく映像民族誌』34集（撮影・制作 国立民族学博物館）日本語、118分。